

# 子どもの社会性を育てる保育とは何か

高玉 和子

駒沢女子短期大学 教授

## 1. はじめに

子どもは将来日本を担っていく貴重な人材である。それと同時に、それぞれの家庭における大切な家族員の一人であり、親にとってはかけがえのない存在である。

近年若者の道徳的、社会的モラルの低下が問題となっているが、家庭の養育能力が低下したのであるか。それとも、学校教育が機能しなくなったのであろうか。それに対する答えは現時点では明確に断言することは難しい。しかし、これまでの先行研究から指摘されていることは、一つには家庭におけるしつけがゆるくなっていること、もうひとつの要因として学校教育が学力偏重に傾いていることがいえるのではないだろうか。

どのような人間に育てて欲しいか、あるいは育てるかというビジョンが大人の側で揺らいで、今この時点での子育てに力を注ぎ育て教育することに重点を置いているようにみえる。子どもの将来像を想定した養育や教育のあり方がなおざりにされている、と感じているのは筆者だけだろうか。

ここでは、子どもの家庭におけるしつけと、保育所や幼稚園など保育・教育施設が担うべき教育の役割について述べながら、どのような社会性を身につけることが必要かについて

論じていくこととする。

## 2. 社会性を身につける必要性

社会性が全くない子どもが大人になった時、どうなるのであろうか。社会性とは、人間関係能力と文化に適應する力、つまり社会環境への適應力の二つの要素がある。

まず一番目に人間関係能力であるが、これはコミュニケーション能力ともいわれる。人としてこの世に誕生し、家庭を中心とした生活の中で親と出会う。胎児のときから母親の胎内で育つため、誕生前から母子相互作用が生じていると考えられるが、今回は出生後以降の人間関係について考察していく。

子どもは母親や父親、あるいはきょうだいの中で育っていく。親の生活様式に沿った日常の流れの中で、子どもは一緒に生活している。親をはじめとした家族のメンバーが子どもの世話をし、言葉を教え会話をする。日常生活が円滑にできるように、基本的な生活習慣である食事、睡眠、排泄、着脱衣、清潔を繰り返し毎日行うことで、子どもが自立できるように教えていく。この基本的な生活習慣は誰でもしていることと一般には解釈されている。

しかし、当然と思われているこの日常的行為が身につけていない子どもたちが徐々に増えている。子どもたちの中には食事を毎朝取

らない、便秘で排泄が毎日出ない、深夜まで起きていて朝寝坊する、適切な洋服を着ない、お風呂に入らない、あるいは手をきちんと洗わないなど、家庭でのしつけに疑問を呈するさまざまなことが起こっている。それに加え、人と話すことが苦手、人と一緒に活動することに困難を伴う子どもも出ている。会話をすることは自然とできるわけではなく、家族とのやりとりを通じて相手と話すことが可能となる基盤があるからである。実は、これも一種の訓練であるといえる。訓練というより、むしろ経験を重ねて人とスムーズに会話が成立するともいえる。

皆さんは『狼にそだてられた子』という本をご存知だろうか。この本は事実に基づいて書かれたといわれているが、二人の姉妹が幼い頃、親から捨てられ7年間狼に育てられた話である。言語を習得すべき乳幼児期に人との関わりがなかったことから、この姉妹は発見されるまで言葉を発することがなかった。J・A・L・シング牧師に養育される過程で、狼の遠吠えはするが、言葉をいくら教えてもほとんど覚え、人との関わりも情感もほとんど獲得できなかったのである。人間の身体的行動として二足歩行が基本であるが、狼をモデルとして育ったことから二本の足で直立して歩くことが出来るまで数年かかったのである。また、昼夜が逆転した生活を過ごし、昼間に寝て夜になると活動した。この事例からわかるように、人間の言語の獲得には臨界期があり、人間関係能力も社会環境の適応力も乳幼児時期からの周囲の人間との関わりや環境条件がとても重要であることを示している。

現代社会でも似たようなことが見受けられ

る。四六時中TVに子守をさせたり、親が子どもに話しかけないなどによって、幼児期に言葉の発達に遅れがみられる子どもがいる。放っておいても子どもは育つと思われがちだが、子どもは人から言葉を習い、様々な経験をしながら事物と言葉をつなげ認識していく。また、周囲との関わりの中で言葉を習得していく過程は個々人により格差がある。語彙や表現力に差が出たり、理解力に格差が生じるのは何故だろうか。筆者は、家庭における家族の関わりと家庭環境の条件の違いが関係しているのではないかと考える。

基礎は家庭で形成される。子どもの周囲の環境や事物に対する認識は、まず家庭が出発点となり、物的環境としての部屋や家具、玩具、絵本、TVなどを見たり触ったりして認識し、また親やきょうだいなどの家族から人的環境を認識することになる。このようにして、子どもの社会に対する認識の基盤は家庭で最初に形成されるのである。

### 3. 子どもの養育環境

保育所や幼稚園に通う年齢の子どもたちは、日々の生活の中で家庭以外の物的・人的環境を体験することになる。今まで慣れ親しんだ家庭とは違う空間で、保育施設の部屋や設備、園庭、大型遊具、玩具などの配置や機能、構造について認識していく。また、そこでの人的環境としての園長先生をはじめとした保育士や幼稚園教諭など、自分の家族とは異なる人々との出会いは子どもなりにカルチャーショックを受ける。しかし、すぐにそれらの人々の言葉の表現や行動様式を巧みに自分の中に取り入れていく。先生達の話し方やしぐさを真似て、家で家族を驚かせることがある。

また一方、保育施設でままごとなどの遊びをしている時、母親や父親と同じ口調で話したり、動作を真似たりして再現している。子どもは身近な人物の行動様式をよく観察して模倣し、それが個人の社会性の発達に取り込まれていく。

子どもが社会や他者との関わりに関して適切な認識をもつことは乳幼児期から徐々に形成されていく。日常生活の営みには実に多くの手順や方法が含まれており、習得のプロセスには家族などの身近な人々の言動を模倣することから始まり、次第にその対象を広げていく。保育士や幼稚園教諭、そして小学校以降の教師など、保育・教育分野の中だけでも多くの人々から社会性を学び取る機会がある。さらに、親族や地域社会の人々との交流、スポーツや習い事などの所属団体の関わりからもさまざまなことを学ぶことになる。家族とは違う他者の集団の中で一緒に活動し協働していくことは、基本的な生活技術と社会性があれば順応していくことができると考える。

一方、実親が育てられない事情により施設で育つ子どもたちはどうであろうか。0歳児から乳児院に入所し、その後児童養護施設で継続して育てられる子どもたちは、親に代わり施設の職員(保育士や児童指導員)が日常生活の養育を行う。集団生活とはいえ家庭の営みと同じように、子どもたちが社会に巣立っていけるよう基本的な生活習慣を教え身につけるよう自立支援を行っている。施設職員は日々子どもたちと関わり養育しながら、子どもたちの心の支えになれるよう努力している。そのような状況にいる施設の子どもの9割以上には実親がおり、いつかは自分の親と一緒に暮らしたいと願っている。

社会性の基盤は家庭で形成されていくと前述したが、施設の子どもたちはどのように社会性を身につけていくかを、以下の文章から汲み取って欲しい。

「子どもとの濃密な長期的な関わりは積み重ねによって、親ではない人とのあいだにおいても、基本的な考え方・感じ方を共有することができるという体験をすることにより、子どもたちの問題解決の糸口が現れるのです。子どもにとって自分を支えてくれる環境とは、『自分には応援団が一杯いる』ということを実感し経験を積み重ねることによって生まれてきます。これが信頼感や安定感を生み、自信をもっていくようになるのです。」

(出所：村瀬嘉代子監修、高橋利一編『子どもの福祉とこころ』新曜社 2002年 p.64)

上記にみるように、子どもの育つ過程の中で出会った人々が自分を見守り必要なことを教え援助し、いつでも受け入れてくれる人的環境の中で沢山の社会経験を積むことが、いかに重要であるかがわかるであろう。

#### 4. 子どもの社会性を育む保育・教育環境

子どもたちは家庭において、親から他者との接触や交流などの機会を与えられることになる。旅行やテーマパークに遊びに行く、あるいはレストランに食事に行く、親戚や知人の家を訪問する、お祭りや映画、演奏会、観劇に行く、先祖のお墓参りをするなどあげられる。身近なことでは、買い物や散歩、ドライブに行くなど、これらの日常的な出来事は誰でも経験しているはずである。このような

家族の外出では、家族と一緒に家にいる時とは違う環境や条件の中での身の振る舞い方をそこで習うことになる。たとえば、旅行に行く場合には、宿泊する旅館やホテルは自宅とは違う。部屋の設備の使い方や過ごし方、他の客に迷惑がかからないようにするマナーなどを実際に学ぶ良い機会となる。このようにして、親は子どもが社会に適応していける生活技術やマナーを実践して示すことにより教えていく。

しかし、家庭における経験には限界があり、子どもは自分が生活している社会やもっと広い世界を知るためには、他者を含めた集団的教育環境が必要となる。そこで、保育所や幼稚園、学校といった保育・教育施設が登場することになる。それらの施設は意図的な集団組織であり、そこに所属することは普段の家庭での生活範囲を超えた環境と人々にめぐり合うことになる。家族単位では他者との交流範囲が狭いが、様々な地域から通ってくる子どもたちとの出会いや、親とは違う大人の存在、つまり“先生”との出会いもある。保育所や幼稚園においては、子どもの乳幼児期は人格形成の基礎を成す重要な時期であると位置づけ、人生の最初の段階を円滑に踏み出すことができるように保育・教育の共通目標と保育内容を定めている。それは「保育所保育指針」や「幼稚園教育要領」にみることができる。

先進諸外国における保育教育の位置について概観すると、子どもの乳幼児期に必要な子育てにかかる費用を国や国民が負担することに合意があり、小学校入学前の1～2年間を教育の一貫性を保つための就学前教育として積極的に位置づけ、無料で保育・教

育を受けられるようにしている。ノルウェーでは、子ども時代は高い価値をもつものであり、子どもの自由時間や遊びの重要性に着目し、ありのままの子どもでいられるよう配慮する保育施設の運営や管理をするようにしている。また、イタリアのレッジョエミリア市では、子どもの生活を大切にす保育観をもち、子どもを「有能な学び手」として試している。子どもはすでに乳児の時から自ら「発見し、考え、仮説を立て、確かめる」という学びの基本を実践していると捉えている。これらの例にみるように、子ども時代の子どもが本来あるべき状態でいられるようにすることが大切であり、保育所や幼稚園で知育的に教え込むことに傾倒する保育が望ましいわけではないことを示唆している。子どもは遊びの中で、数や図形、文字を覚えていく。子どもの持っている自ら学ぶ力を信じ、それを適切に伸ばしていける環境を整えることが、今まさに求められているのである。

振り返ると、日本では本当に子どもの保育・教育を重要と捉えているだろうか。子どもの保育教育関係予算をみると、高齢者の介護医療費等の予算と較べてあまりにも少なすぎるといえる。日本の保育は保育者個人の能力や努力に頼りすぎる傾向があり、過重労働によって支えている現状がある。たとえば、一般的に現在の幼稚園教諭は担任1人で1クラス30人ほどの子どもを保育している。ある幼稚園では、朝7時に出勤し、窓明けや掃除などの受けいれ準備をし、登園してきた子どもの保育に入り、子どもが降園した後は片付け、掃除、次の日の保育や行事の準備に追われ、気がつくとも12時間以上働いていることになる。このような過酷な日々の仕事は何年に

もわたって続くわけがないという。いわゆる「燃え尽き症候群」となって退職していく保育者が後を絶たない。それは先進諸外国の保育者配置数との比較にも関連している。先進諸外国との保育者配置比較に関しては、すでに前回の紀要で述べているため参照して欲しい。

## 5. まとめ

近年幼少一貫教育が提唱されているが、個人の教育の流れを円滑に学ぶ道筋をつけていくことには異論はない。しかし、これからの保育・教育においては乳幼児期の子ども本来の力を発揮できる保育・教育施設のあり方を検討していくことが重要なのではないだろうか。子どもが自ら学んでいく力を最大限伸ばす環境を整備していくことを第一に考えていかなければならない。

物的環境としては、子どもの遊びを保障する時間や空間の確保、国などによる施設管理運営費への助成の拡充、入所を希望する子どもの受け入れなどを整えていくことが求められる。さらに子どもたちや地域に格差が生じないように配慮が必要である。

また、人的環境である保育士や幼稚園教諭といった保育者の養成も重要である。保育者の専門的知識や技術を高めようとするあまり、人間としての人格的資質を広げていく教育がおろそかにされないよう願うものである。人を受け入れる心の広さ、美しいものを見て感動する感受性、情緒が安定し子どもの目線に立って共感できる、そんな素敵な保育者にめぐり合えた時、子どもの能力は飛躍的に伸びる機会を与えられるのである。保育者は信頼できる存在として子どもの心に寄り添い生活

をともしていくことによって、子どもの知性や感性、社会性を育むことに繋がっていく。

日本では、保育者の配置数が子どもの人数に較べて少ないため、十分に関わる時間が取れず余裕がない保育をしているのが現状である。このような状況を個人の力で変えることには限界がある。子どもの社会性の育成という主題を掲げて進めてきたが、保育所や幼稚園の現状を考えると一刻も早く適正な保育者数を確保して、子どもたちの育ちに困難が生じないようにすることが肝心であることがわかるであろう。

ここ数年来、子どもがキレたり、校内暴力の低年齢化により小学校の暴力事件が急増している。子どもの心が荒んできていることは明らかである。家庭環境や教育環境いずれも問題を抱えている場合が多くなっているからこそ、子どもの社会性を伸ばす保育・教育が重要であるといえる。そのためには、子ども本来の力を信じ伸ばす保育・教育環境を提供することを、重要課題として取り上げていくべきである。

### 〈参考文献〉

- アーノルド・ゲゼル著 生月雅子訳『狼にそだてられた子』家政教育社 1967年  
 大宮勇雄『保育の質を高める』ひとなる書房 2006年  
 村瀬嘉代子監修 高橋利一編『子どもの福祉とこころ』新曜社 2002年